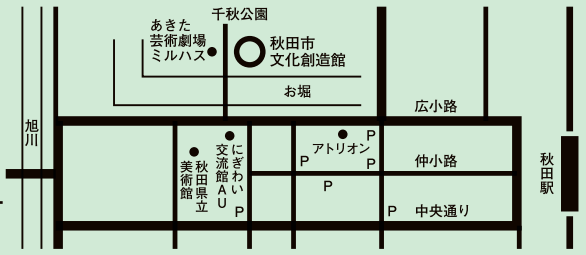
秋田　市　文化　創造　館
AKITA　CITY　CULTURAL　CREATION　CENTER

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町 3-16
開館時間 9:00–21:00
休館日・火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）
・12月29日–1月3日
お問合せ Tel: 018-893-5656　Fax: 018-893-5659　e-mail: info@akitacc.jp
公式ウェブサイト https://akitacc.jp

そう SO　SURU? する？

4号　2023年3月



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

カッキンラプソディー　イン　アキタ

滑琴狂走曲 in 秋田！



写真：伊藤靖史（Creative Peg Works）













おおしまたくろう

スケートボードにはじめて乗った時のことを思い出す。アスファルトの凹凸が振動として足へ伝わり、見た目では区別できない路面の違いがわかるようになった。また車や歩行者が少ない練習場所を探して街を移動するうちに、普段は通らない路地や知らない空き地を見つけた。

路面への感度が高まり、新しい場所（スポット、点）を見つける。そのうちスケートボーディング（スケートボードに乗ること）のためのお気に入りのルート（線）ができる。それは何の変哲もない線だが、街の中で自分だけが知っている愉快な線だ。そうして点の連なりが線になり、線が何本も引かれて、住み慣れた街に新しい空間を造る。

スケートボードに乗ってから「街」という空間の考え方が変わった。同じ街に暮らす人々が、それぞれ違った行動規範（コード）で街を移動して、異なる空間を造って生きている。そんな風に考えると、もっと自由に街の中に自分の空間を造って生きても良いのでは？

音楽をコードとして街を移動する、街全体を楽譜に見立てて演奏するようなアイデアを考えるようになった。そして、スケートボードとエレキギターを合体させた「滑琴（かっきん）」という楽器を発明した。

コロナ禍では、滑琴を用いてオンラインや路上での発表活動に取り組んだが、以前と比べて活動のインパクトが広がらないことに悩んでいた。そんなタイミングで秋田市文化創造館の企画に採択され、2ヶ月に1度のペースで秋田市内に滞在して、1年ほどかけて音楽イベント「滑琴狂走曲 in 秋田！」を制作した。

今回の制作を象徴する出来事は、秋田市文化創造館でのスケーターの敷地利用を巡る議論だろう。スケーターによる混雑時や夜間の敷地利用に対する住民からの苦情に端を発し、館内スタッフとスケーターをはじめとする関係者による共存とルール作りに向けた議論が行われていた。「誰のための場所なのか」という言葉を館内での作業中に何度も耳にした。

滑琴を使った滞在制作のプランは、こうした議論とは関係ないところから始まったが、意識しないわけにはいかなかった。敷地利用の議論と作品体験を接続すべきか悩んだが、結果的に距離を置いたところで制作を進めた。難しい判断だったが、議論すべきことを作品化することはないと考えた。つまり、言うべきことは議論して、言えないことは作品にする、という態度である。

エレキギターも漫画も、かつては排除の対象として扱われていたが、現在ではユースカルチャーの象徴として発展している。その背後には、根気強い議論による環境整備とルール作り、そしてジョイフルに溢れた作品体験があったはずだ。

スケートボードの楽しさ、ノイズミュージックの迫力、異質なものが出会うことで発生するユーモア。そして、それらを受け入れる秋田市文化創造館という器。それらは言葉で説明されるより体験して実証するものだろう。ビートルズと手塚治虫は大きすぎる目標だが、私なりのジョイフルを今回の制作に詰め込んだ。改めて、最後までプランを妥協することなく実施させてくださったことに感謝したい。

おおしま・たくろう
PLAY A DAYをテーマに、身近な道具を改変した楽器の制作と、それらを組み合わせた少し不思議なパフォーマンスを行う。音楽や楽器の名を借りた遊びやユーモアによって社会の不寛容さをマッサージする。第23回学生CGコンテスト：アート部門優秀賞（2018）、2019年度創造活動助成 for U30採択（2019）、The Medium Is The Massage LIVE!!!!（DOMMUNE, 2017）、サウンドパフォーマンス・プラットフォーム 2018（愛知県芸術劇場）、Skateboard meets Electronic Guitar おおしまたくろう楽器展 #1 滑琴（かっきん）（FIGYA, 2019）、ホリデーパフォーマンスvol.5：おおしまたくろう（ロームシアター京都, 2020）、みなと A GO GO! 2021（港まちボットラックビル）

クリエイター・イン・レジデンス2022

秋田県内外から招聘された多様な分野の専門家やクリエイターが秋田市文化創造館に滞在し、市民の創造力を刺激する実験的なテーマに取り組みます。2022年度は、公募「SPACE LABO 2021」にて採択された2名のクリエイターによるまちなか活動プランの制作・発表を行いました。

カッキンラプソディー　イン　アキタ
滑琴狂走曲 in 秋田！

2022年5月14日（土）～2023年1月29日（日）

「滑琴」とは、スケートボードにエレキギターの弦・ピックアップを取り付けた自作楽器。道の凹凸や滑り方によって様々な音を発する滑琴を介すことで、目で見たり、ただ歩くこととは違った方法でまちの特徴を体感することができます。「滑琴狂走曲 in 秋田！（カッキンラプソディー・イン・アキタ）」では、雪に対応した滑琴や音響装置の開発、滑琴の体験会を行いました。1月には集大成として、公募で集まった年代も様々なみなさんと一緒に、轟音と混沌のライブパフォーマンスが披露されました。

出演／げんや、諸越俊玲、竹村真人、リオ、ソウイチロウ
デザイン／丹羽彩乃
装置設計・制作／水口翔太
配信・記録映像／YVStudio
展示設営／船山哲郎、櫻井隆平
機材協力／株式会社デンキトンボ

まちに「いる」こと

私は、普段は国際教養大学のキャンパスにいますが、講義のない日には、五城目町のBABAME BASEというシェアオフィスに間借りしている研究室にいます。この場所で私が大切にしていることは、まちに「いる」ということです。
先日の未来を考えるスクールでも、このテーマついてお話をしました。私たちはある対象について考えるとき、自分自身を一旦その外側に置いて、観察・分析・介入し、課題を解決して、対象を変化させようとしがちです。例えば、あるまちで空家が増えていることを観察し、分析して、解決策を提案する、という具合です。
さて、こうした一連の思考をしているとき、「私」はいったいどこにいるのでしょうか。私には、どうしてもそのときの「私」は、まちのなかに「いない」ように思えるのです。
では、まちに「いる」とはどういうことなのでしょうか。私はそれは、対象の「まち」を外側から見ている私が、実は、はじめからずっとその内側にいることに気付くことだと思います。言葉遊びのように聞こえるかもしれませんが、本当のところは、対象の外側に私がいると思うことのほうが不自然なことなことではないでしょうか。
まちに関わる「私」がその内側にいることに気付くと、1つとても良いことがあります。それは、まちに何か変化が欲しいとき、自分が変われば、もうそのことがまちの変化だということです。だって、「私」は、まちを構成するひとつのパーツなのですから。
私が日々をどんなふうに暮らしたいのかを話すだけで、きっともう、まちは少しずつ変わりはじめていくことでしょう。

「未来の生活を考えるスクール」第9回
まちが終わること、続くこと

縮小高齢社会における地域づくりやサステイナビリティ教育など、新しい発展や豊かさの定義を研究する国際教養大学准教授の工藤尚悟さんと、「変化にもっと優しく」という理念を掲げ、地域の変化をありのまま受け止めていくことのできる状態をめざすNPO法人ムラツムギ共同代表理事の前田陽汰さんをゲストに迎えてレクチャーと考えるワークを行いました。

日時：2022年12月18日（日）
会場：スタジオB

開催レポートはこちら

工藤尚悟（くどう・しょうご）
国際教養大学国際教養学部グローバル・スタディズ領域・准教授。東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了（博士・サステイナビリティ学）。南アフリカ・フリーステート大学アフロモンテーンリサーチユニット客員研究員。専門は、サステイナビリティ学、開発学、教育学、地域づくり。秋田と南アフリカ・ザンビアの農村地域を行き来しながら、異なる風土にある主体の邂逅から生まれる“通域的な学び（Translocal Learning）”というコミュニティ開発の方法論の構築に取り組んでいる。秋田県能代市出身。近著に『私たちのサステイナビリティ：まもり、つくり、次世代につなげる』。



「スクール」後に工藤さん、前田さん、参加者と開催された「カタルバー」

あとはよしなに よろしく頼む

カタルバーは、ゆるやかに語り合える場・「やってみたいこと」を試してみる場として、毎月5のつく日は文化創造館のスタッフが店主となり開店、市民のみなさんからも随時「1日店主」を募集している。どうしてこんなことになったのか。
文化創造館の2階には、県立美術館時代のチケットカウンターが残されている。貸し出しスペースにはなっておらず、特に説明もされないので、「謎のカウンターがあるな」という状態になっている。館内やイベントでよく顔を合わせていたHさんが、「2階のカウンターが良い感じ。中に立ってみたいし、同じこと考えている人も多いと思う。」というようなことを話してくれたのが2022年の2月。この時わたしはちょっと疲れていたのだと思う。みんなの「こうすればもっと良くなる！」という期待や提案を、勝手に重荷に感じていた時期があった。「おうおう、思いついた人がなんでもやったらええ！」と、半ば強引に、Hさんと、いつもアイデアが溢れている常連Sさんに声をかけて作戦会議の場をセッティングした。そこで生まれたのが「1日店主」のアイデアで、口コミや店主に立った人の紹介、お客さんとして来た人が自分も店主に…など、少しずつ広がってきている。
文化創造館がやるのは、館内のどこかを開催場所としてお貸しすること、チラシを作ってウェブやSNSで告知をすることくらい。何か思いついてから形にするまでにかかる時間と手間をできるだけ小さくして、テーブルと椅子があれば、まぁ最悪何もなくても、カタルバーはできる。そのくらいの気軽さで、文化創造館を使ってもらえたらと思う。施設は使う人が作るのだ。

石山律（いしやま・りつ）
当館コーディネーター。18歳まで山梨県甲府市育ち。盆地の風景がけっこう好きです。文化創造館では「未来の生活を考えるスクール」などの事業企画をしています。

2階のカウンターでも屋外エリアでも1階のコミュニティスペースでもOK







カタルバー店主募集中

誰かと語り合うだけのバーです。ゆるやかに語り合える場、「やってみたいこと」を試してみる場、として開いています。毎月5のつく日は、文化創造館のスタッフが店主。市民のみなさまからも「1日店主」を募集しています。偶然出会った人と話してみたい方、小さい規模で企画を試したい方、ただカウンターの中に立ってみたい方など、随時募集しています。

【問】秋田市文化創造館
電話：018-893-6424（9:00-21:00／火曜休館）
メール：program@akitacc.jp

木の岐はつづく

2022年山とものづくりの旅は「山を手に取るは山のホームセンターのはじまり」として木の岐（また）をテーマにした展示（秋田市文化創造館）と行商（秋田市民市場）で終えました。行商人として秋田市民市場で交わした数々の木の岐の話には、豆打ちとして使っている風景を見たことのある人。パチンコを作って遊んでいたおじ様達。並べていた木の岐を「売ってるんですか？　欲しい」と言って声をかけてくれた少年（喜んでお譲りしました）がいました。人々との交流を通してこの木の岐という忘れられつつある木の民具が私たちにとってどんな意味を持つのか？　あるいは持つことができるのかを考えました。しかし、その答えはまだ先にあり、とにかく作ってみないとわからないので、2023年の実践編へと続きます。
次はこの木の岐の形や性質を利用したかつての知恵をさらに分析し、それを元に多くの人が山でそのアイディアを実践する方法を考案したいと思います。また、私自身もそれを活用して木の岐の採取から道具を作りまでを行い、現代の「木の岐のある生活」をみなさんに提案したいと思います。

PARK
PARK｜いきるとつくるのにわ

秋田に暮らす人々やクリエイター、専門家が交わり多様な活動を展開するプロジェクト「PARK – いきるとつくるのにわ」では、「観察する」「出会う」「育む」「残す」の4つのプログラムを通して、秋田の文化的土壌をたがやしていくことを試みます。

制作レポートはこちら

「雪室制作」（「観察する」クリエイターによるリサーチと表現）

わいないきょうこ（デザイナー、やぶ前）

2022年12月3日（土）～2023年3月
長らくロンドンを拠点に活動後、近年は母の故郷である美郷町を拠点にするわいないさんが、秋田の食材を使いながら新たな食風景を作り出すプロジェクト



「この町、シネマ。」（「観察する」クリエイターによるリサーチと表

アウトクロップ（映像プロダクション・ミニシアター）

2022年12月2日（金）～2023年3月
秋田を拠点にドキュメンタリー制作やシネマ運営を行い、クリエイターとし
アウトクロップ・スタジオと、秋田市中心市街地にて新たなプロジェクトを





2022年10月29日（土）
「あなたのお家の“柿・栗”採りにいきます」柿収穫



「山を手に取るは山のホームセンターのはじまり」

・秋田市文化創造館1階展示：1月20日（金）～28日（土）
・秋田市民市場（なんでも広場）展示：1月20日（金）～21日（土）
・秋田市民市場作家滞在：1月21日（土）

かつて人は暮らしに必要なものを求めて山に入っていきました。自らの身体を使って山を歩き、素材を採取してきました。今、私たちが入っていくホームセンターとは違い、そこには身体を育む営みがありました。山の身体技法を求めて〈身体0ベース運用法〉は山で採取し、手を動かすことからはじめました。本展ではその素材やそこから作り出した道具を展示。秋田でのリサーチ内容を元にした展示と、〈身体0ベース運用法〉が行商人に扮し、秋田市文化創造館や秋田市民市場で滞在制作を実施しました。

開催レポートはこちら



写真：坂口聖英

身体0ベース運用法
（安藤隆一郎　あんどう・りゅういちろう）
2016年より染色作家 安藤隆一郎が始動した「ものづくりの視点」から考える身体論。「身体」と「もの」との関わりから生まれる感覚、運動、機能を「0」から見直し、人間が本来持っている「身体」の運用法を見出す。安藤は1984年京都生まれ、大阪在住。2009年京都市立芸術大学大学院工芸科染織専攻修了。現在、同大学染織専攻講師。

「食べること、社会の中で生きること」

（「出会う」新しい知識や技術と出会うトーク＆ワークショップ）

講師　磯野真穂（人類学者）、
西原珉（キュレーション、ライター、心理療法士）
2022年10月22日（土）

開催レポートはこちら

「大地をたがやす芸術実践」

（「出会う」新しい知識や技術と出会うトーク＆ワークショップ）

講師　奥脇嵩大（青森県立美術館 学芸員）、
服部浩之（インディペンデント・キュレーター）、
野ざらし［青木彬（インディペンデント・キュレーター、一般社団法人藝と）、佐藤研吾（建築家）、
中島晴矢（アーティスト）］
2022年11月23日（水・祝）

開催レポートはこちら

「育む」

（秋田で暮らす人々が手を動かしつくることを実践する場）

「育む」では、集まったプロジェクトメンバーの方々と共に、秋田市文化創造館での野菜栽培や観察に取り組みながら、食と結びつく様々なテーマについて学び合いました。秋には放置された柿や栗の木を秋田市内で募集して実施した柿の収穫と干し柿作りや、自作の燻製機で家庭版いぶりがっこ作りにも挑戦しました。





2022年10月30日（日）
「あなたのお家の“柿・栗”採りにいきます」干し柿づくり、栗の皮むき

写真：山本美里





「食べる」が繋ぐ縁。

「食べる」ということは、人を呼び人を繋ぐ力がある。そして台所や食卓はそれを生み出す場になる。いつもイベントの後片付けをしながら思うことです。
うましき台所帖は、昨年7月から月1で開催している料理教室です。料理のレシピやコツを学ぶだけでなく、集まった人たちでともに食べ学び考え、秋田の暮らしを見つめなおす場としています。
毎回、参加者15名と講師、スタッフが一堂に会するわけですが、少し緊張感のある雰囲気ではじまっても、最後には、大げさに言うと同志になったような空気になります。それが毎回不思議でおもしろくて、「今日があってよかった」と思います。
うましき台所帖は、前半に調理、後半はできた料理を食べながら、講師の話を聞いたり参加者も含めて対話する2部構成です。初対面の3～4人で1つのテーブルを共有するのですが、調理をはじめると一気に距離が縮まり、「おいしいね」「こんな料理にも使えそう」と自然に会話が生まれます。この移ろいを見ていていつも、あたたかい気持ちになります。
それはきっと講師も同じ。第5回講師の佐々木一成さんは漁師として食卓に魚を届けていますが、普段は食べる人と顔を合わせることはありません。うましき台所帖で参加者と一緒に魚をさばき、魚を楽しむ様子を見て、直接伝える可能性を感じてくださったようでした。
「食べる」が繋ぐ縁。台所で料理をしたり、食卓で食べることで、人と人の間に連帯のようなものが生まれる気がします。企画をはじめる前には想像していないことでした。うましき台所帖で調理や試食をする小さなテーブルが、小さな台所や食卓になって、秋田の食を考える仲間ができたようなうれしさがあります。「食べる」ことの可能性を感じられる時間です。



美郷町在住の照井律さんとつくった寒天料理



國重咲季（くにしげ・さき）
うましき台所帖スタッフ。京都府生まれ。大学進学を機に秋田へ。在学中に田畑に通っていた時間が忘れられず、関東での会社勤めを辞めて再び秋田へ。現在はにかほ市に暮らし、週末は潟上市の畑に通う。

「うましき台所帖」は2022年7月より毎月開催している、月ごとに講師が変わる料理教室。毎回、調理を教わるだけでなく、トークの時間も設けており、講師と参加者がともに手を動かし、味わい、語り合い、学び合う場となっています。これまで、寒天、豆腐、出汁、魚、麹、保存食などをテーマに開催し、レシピだけでは伝わらない思い、その食の背景にある文化なども掘り下げて伝えてきました。うましきという言葉には「美味しい」「美しい」という意味があります。この土地の魅力や生き方をあらためて考え、うましき心を育む場にもなっています。

うましき台所帖

開催レポートはこちら

新しい歳の風

「その源は冬の嵐なのではないかと思った」。数年前になまはげ行事をリサーチしたあるアーティストは、嵐の吹き荒れる大晦日の夜なまはげの訪れを待ちながら、風雪が家の戸を鳴らす音を聞き、そう感じたそうです。「気配」のなかに目に見えぬものの「存在」を感じ取る、自然と共にある人々の畏怖畏敬の念のあらわれかもしれない、とうなずけました。
「秋田といえば」と誰もが連想するほど有名な来訪神行事である男鹿のなまはげ。真山神社の麓にある「里山のカフェににぎ」は、農家民宿も営んでおられ、大晦日の夜そこに宿泊する人は地域のなまはげ行事を一緒に体験することができます。ご主人の猿田さんもまた、行事の担い手の一人です。
我が子とともになまはげ行事を体験したいと訪れた三家族の皆さんと一緒に、猿田さんのお母さまが丁寧に手作りされた美味しいおせち料理をいただきながら、訪れを待ちます。気持ちよく酔いが回り始めた頃、先達（さきだち）の男性がやってきました…いよいよです！
座敷に猿田さんと小学6年生の息子さんが並んで待ち構えていると、遠くからオー、オーと咆哮（ほうこう）が… あっという間に座敷に上がり込み、部屋中の戸を叩き鳴らし、反閇（へんばい）の如く大きく足を踏みながら、怠け者はいねえが、泣く子はいねえが、と主人や子どもたちに容赦なく詰め寄ります。
子どもたちが両親の首もとにしがみつき涙を浮かべて耐えていると、主人は御膳とお酒をナマハゲに勧め、応対をします。そのやりとりをよく聞いてみると、家族の一年の労苦や努力を労い、いつもお前たちを御山から見守っているからな、という慈愛に満ちた問答なのでした…
なまはげたちは、杯の酒を二杯三杯と飲み干しもうひと暴れして、ケデ（装束）の藁を撒き散らして去って行きました。ほっとしてぽろぽろと涙を流す子どもたちを抱きしめながらもらい泣きする三親子の姿に、こちらもほろり…
数年前は今日の子どもたちのように怯えて泣いていたのに、今日はお父さんと一緒に立派に応対していたね、と息子さんの成長に目を見張る皆さん。受け継がれてゆく場に居合わせることができ感動しましたが、同時に人口減少やライフスタイルの変化によって行事自体を続けることの困難さも、猿田さんは話して聞かせてくださいました。
かくして怒涛の如く訪れたなまはげは、一人ひとりの心を打ち震わせ抱きしめて去り、入れ替わるように、新しい歳の風が舞い込んできたのでした。

前田優子（まえだ・ゆうこ）
当館コーディネーター。広島生まれ。佐渡～東京～いわきを経て秋田になが れつき、三度目の春を迎えます。国内外問わず、風土に育まれみがかれたうつくしいものたちに、たまらなく心惹かれます。





清掃する
高坂さんと菊地さん（当館清掃担当／友愛ビルサービス）

高坂さんと菊地さんは2021年の7月1日から秋田市文化創造館の清掃をしています。コミュニティスペースや廊下、階段、トイレ、スタジオABや準備室、1階と2階の風除室に至るまで、いつもピカピカなのは主にこの二人によるものです。
清掃の仕事をするようになって、高坂さんは11年目、それまで8年間は二人の母親の介護をしていました。その前は市内の本屋で書店員として14年働いたとのこと。菊地さんはこの仕事に就いて8年目、以前は事務員や外回りの営業をしていたこともあります。
高坂さんと菊地さんは週5日勤務、休館日の火曜と、土日は交互に休みます。朝8時に清掃スタート、10時までの2時間か、11時までの3時間、それも交互に担当します。2時間の場合はフロア、トイレを、3時間の人は階段とスタジオも掃除します。
曜日ごとに、スタジオA1～3、スタジオBと振り分けられています。床を掃き、拭き、ゴミを回収し、ドアや壁面、備品を拭き上げていきます。トイレの便器、洗面台、鏡がピカピカだと、疲れている日にぐらつく気持ちをしゃんと元に戻してもらうようです（土日どちらか一方が休みの日にはフォローの人員もいます）。
高坂さん：若い頃からずっと働いていました。本屋を辞めたのは親の介護をしなくてはならなくて。本屋さん、楽しかった。親がなくなった次の年に職を探しました。年齢的に、今の会社がよかったので、入れてもらったんです。お休みの日は家事に振り回されて、ちょっと横になってテレビを見るくらいがほっとする時。
菊地さん：私も親と同居していたこともありずっと働いてきました。孫が女の子二人でかわいい盛りです。ここでは短時間フル回転してようやく終えられるので、来館者の方と触れ合う機会もそんなにないのですが。でも掃除しながらも見えます。ここに来てから皆さん、絵を描いたりするのが上手な人たちを目の当たりにして、目の保養になります。私は学生時代、何をやっていたんだろうって。今の若い人たちは向上心があって、企画なんかも自分たちで考えて会議なんかやるんでしょ。すごいなあと思って。私も若かったら今度はいろんなことに挑戦してみたい。

絵：牧野心士（当館スタッフ）
聞き手：熊谷新子（当館スタッフ）



菊地さん

高坂さん

秋田市文化創造館とKIITOのこれからを「ふうど」を通して考える

デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）には、「クリエイティブラボ」と呼ぶオフィススペースがある。その1室に入居するRe:S（りす）は、秋田県発行のフリーマガジン『のんびり』制作を担当していた編集事務所である。KIITOのライブラリに配架される同誌を通して、なまはげときりたんぽ以外の秋田、マタギや寒天なんかも知っているつもりでいた。秋田市文化創造館についても、送られてくるオープンに向けた告知やオンラインでの意見交換を通して知っているつもりでいた。しかし、2022年6月の秋田訪問で、知っている「つもり」だったことに気づかされたのだ。
わたしにとっては初めての秋田であり、初めての文化創造館であり、初めての三富さんだった。文化創造館のコミュニティスペースの開放感、デッキを通してまちとつながる空間、スタジオに降り注ぐ光、参加したカタルバー。来ているひと、働くひと。センシューテラスでのドーナツとビール、スタッフとの焚火郷土料理と日本酒、秋田市民市場で一緒に食材を買って作った朝食。「秋田の風土」を通して文化創造館を知る、という目論見はいつの間にか「秋田のフード」に変換されていたようだ。
訪問前に知ったつもりでいた秋田と文化創造館だったが、風土とフードを通して時間と空間をひとと共有することでしかわからないことがたくさんあった。当たり前のことなのに、コロナ禍においてはひととの接触が感染を広めると言われ、オンラインが推奨され、それが同じ価値をもつものなのだと、わたしたちの交流にまで勘違いを与えていたのだ。
施設間の連携協定であるが、連携の結節点は常にひとである。風土とフードを通して時間と空間を共有し、引き上げられたわたしたちの共感の解像度をどのような活動として紡いで行けるのだろうか？活動について、佐藤養助商店の稲庭うどんを味どうらくの里のつゆで食べながら考えようと思う。



KIITOスタッフが当館を訪れ、秋田市民市場で購入した食材で朝食を調理中

近藤健史（こんどう・けんじ）
2012年からデザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）勤務。「＋クリエイティブ」をコンセプトに社会的課題の解決を目指す様々な活動や、レクチャー、ワークショップ、展示などの企画・運営を行う企画事業部のマネージャーを務める。

かえるくんの危機！

いつもの時間は穏やかだけど、長く暮らしていると時々危機的出来事に巻き込まれる。時間の質がグルグルっと変わり別次元になる。突然襲われることもあるし、気づかないうちにジワーっと侵されることもある。これがタチが悪い。
僕だってマラリアや海難事件で死にかけたし、災害・事故・怪我・病気など数知れず。長く生きると誰だっていろいろ。イザ！という時どう動くのか。状況を捉え、知恵と経験と感覚を全部使って「助かる方法」を試みる。うまくゆかない時、初めて自分の貧困な発想力と行動力に打ちのめされる。
イメージする力、柔軟な発想力、観察力など様々な力が求められるけど、そんなこと考える余裕はない。感覚的な無意識の瞬発力が必要。とにかく、あきらめたらおしまい。
そんな生きるための感性と行動力、頼れる人との繋がりは日々の生活からしか身につかない。そうぞうする力と活動する力を試しながら、語り合える隣人がいるということは本当にありがたい。だから今日も、ペトンペトンしよう！

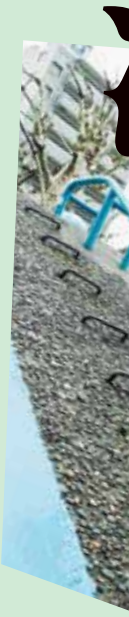
文：かえるくん（館長代理）　絵：藤浩志



連載「秋田の人々」
アウトクロップ回はこちら

やまは蔵、まちの原木、ケズリカケの木々









上：《ケズリカケのあるスイーツボード》
左下：08COFFEEの「スパイスと蜂蜜のケイク」の提供に使用されていたボード
右下：《ケズリカケのあるブックスタンド》





臼井仁美さんに出会えて　児玉陽子（08COFFEE）

芸術家と聞くと、昔からちょっと萎縮してしまう。自分の肩に力が入ってコミュニケーションがうまくとれないのだ。自分にはない才能があって、とにかくすごい人という印象を先に感じてしまう。
でも、臼井さんにはそんなことは感じなかった。もちろんアーティストであって、普通の人にはない才能があるのは変わりないのだが、臼井さんとお会いすると、一瞬でそのような先入観を吹き飛ばしてくれる人だった。前髪ぱっつんの可愛らしい姿、まっすぐな瞳と心で丁寧に展示の趣旨を説明してくれました。何かはわからないけど、彼女にものすごく惹かれるものを感じた。
その人柄に興味をもって、二つ返事で彼女の展示をお手伝いすることにした。
臼井さんにお預けした木の材料は、もともとお店で使っていたもの。小ぶりの本棚だったり、焼き菓子やトーストの提供につかっていた木のボード。コーヒー豆を販売するためにディスプレイに使用していた木の台。購入した当時は、こだわって選んだため頻繁に使用していたけれど、今では出番も少なくなってきた物たち。倉庫の奥から出てきたものもあったりと。9点をお渡しした。
ケズリカケという技法で臼井さんが元の道具を変化させる。そんな簡単なイメージしかもっていなかった私の安易な頭の中を、臼井さんはものの見事に感動的な作品へと変化させてくれました。
2か月後、仕上がった作品が臼井さんの手で静かに店内へと飾られていく光景は、11月のこれから寒くなる秋田を温かくしてくれるものに感じられた。
お預けした時の木の材料は、ただのまっすぐな板でしかなかったのに、手元に戻ってきた木には幾層にもなる　くるん　くるん　のカールがアクセサリーのように見え、わたしはまだ生きているのよと言っているように感じられた。ケズリカケされた姿は、表情が変わり、紙のような柔らかさを感じられる。さらにその柔らかさが、ぬくもりとなって店内を包み込んでいるように感じられた。あったかい。森のように感じられた。私たちが大事にしている場所が、より穏やかに包み込まれるような空間へと変化した。
臼井さんが伝えたかったことが、はっとするタイミングで伝わってくる。さらにそこから広がる風景が走馬灯のように浮かんでくる。自然に生かされていると改めて気づかされた瞬間でした。
彼女から生み出される作品は、もともとの原木の声を呼び覚まし、さらに自然に還る儀式のようにも感じられた。
その後、臼井さんとのお話でケズリカケで生計を立てようとは思えないとおっしゃっていた。それが、私が一番最初に感じた彼女の惹かれたところであると実感した。彼女の伝えたい思いが、本人からいっぱいに感じられる。素敵な想いをもった臼井さんに出会えたこと、素敵な作品に出会えたことに感謝しています。

こだま・ようこ
2011年夫とともに08COFFEEをはじめる。コーヒー豆の袋などのお店に携わる文字を書く。主に接客やケーキや焼き菓子の製造を担当。

08COFFEE
秋田市山王新町13-21三栄ビル2F（県立図書館裏）
TEL＆FAX：018-893-3330
営業時間：10:00～20:00／8:00～18:00（土日祝）
定休日：水曜日
駐車場：店舗1F・第二駐車場あり

ケズリカケ（削り掛け）とは、木を削ってクルクルとカールさせて作り、年中行事や祭礼に用いるものを言います。「やまは蔵、まちの原木、ケズリカケの木々」では、まちなかの蔵や家屋を原木の採集場所に見立て、秋田市内から家具や道具などの原木となる素材を探します。採集した原木を持ち主の意向も伺いながら美術作家の臼井仁美がケズリカケを施し、持ち主に返すプロセスを公開するものです。

臼井仁美展覧会「やまは蔵、まちの原木、ケズリカケの木々」

・2022年11月23日～12月18日 まちなか6箇所での展示
秋田市中心市街地に点在する、様々なお店やギャラリーにご協力いただき、展示を行いました。展覧会フライヤーのデザインをモチーフにしたスタンプラリーを各会場に設置するなど、楽しみながらまちをめぐることのできる仕掛けもありました。（協力先｜交点、ココラボラトリー、高砂堂 本店、08COFFEE、PLAY+TOYS のはらむら）
・2022年12月7日（水）～18日（日）当館1階コミュニティスペースでの展示



左：当館展示風景
中：《樺細工と引き出しのある小箱》
右：《彩画堂の額縁》原木の採集場所である彩画堂に作品の返却





撮影：中島悠二

デザイン：服部一成　榎本紗織　編集：熊谷新子

クリエイター・イン・レジデンス 2022